

学会活動と論文投稿のノウハウを公開・共有しよう - 研究活動支援と学会の自己認識のために

- ✧ 開催日時:2012年6月9日(土)14:00～16:30
- ✧ 場 所:帝京大学八王子キャンパス
- ✧ コーディネーター:中筋直哉(法政大学)・榎田美雄(徳島大学)

～ 発表者(演題・要旨)～

1) 富永 京子(東京大学大学院 / 日本学術振興会)

演 題	大学院生と資金助成・国際(国内)学会報告・論文執筆にともなう困難
要 旨	<p>報告者は、大学院生間で資金助成用書類作成対策会、国際学会報告準備会などを主催する中で、資金獲得や国際学会での報告過程において大学院生・若手研究者共通の、かつ多くの障害があることを見聞してきた。大学院生には国際会議での報告経験のある者は必ずしも多くなく、また応募可能な財団も限られているため、学会報告や資金獲得にあたってどのような技能が必要かということに関しては、研究室内や研究会内でのインフォーマルな情報共有という「手探り」でやっていかなければならないのが現状である。報告者自身も国際学会報告と資金獲得を行うにあたり、むしろ報告やペーパー執筆、資金獲得そのものよりも、そのためのノウハウを共有する場がないことに苦労した。</p> <p>しかし、今後ますますグローバルな競争の中に置かれるであろう社会学の現状と、さらに2014年ISA(International Sociological Association) World Congressが日本(横浜)で開催されることを考慮すると、自らの研究をどのように国際的に価値あるものとして公表していくか、その過程においてどのような課題と解決策があるかを共有していくことは、ともに喫緊の課題であると考えられる。そうした課題の中にはベテラン研究者にとってあまりに些末と考えられるものもあるかもしれないが、若手研究者にとっては重要な問題である。</p> <p>本報告は、資金助成・国際(国内)学会報告・論文執筆に伴う、ある程度大学院生に共有されていると考えられる障害と、その解決策を共有する場の不在を指摘する。さらに、国際学会や資金助成をめぐる諸問題についてオープンに議論するための一助となればと考えている。</p>

2) 齋藤 圭介 (東京大学大学院)

演 題	学会誌における若手研究者の実態 『年報社会学論集』と『社会学評論』の比較から
要 旨	<p>本報告の目的は、関東社会学会の学会誌である『年報社会学論集』と日本社会学会の学会誌である『社会学評論』の主に過去10年の掲載論文のトレンドを明らかにし、各学会誌の特徴を描くことである。関東社会学会と日本社会学会の学会誌は、それぞれ会員数(ノ投稿数)や査読のシステムが異なるため、一概に比較はできない。しかし、若手支援という観点から、公開されている諸データ(掲載論文の執筆者の職位をはじめ、掲載論文に院生が占める割合など)の集計と分析をとおして、若手研究者と学会誌の関係について議論するさいの基礎的データを提供したい。本報告は、学会誌ごとの全体的な特徴を広く若手研究者と情報共有すると同時に、学会における若手支援活動の今後の方向性を検討するさいに必要なデータとは何かについても問題を提起する。</p> <p>なお、社会学系の学会誌は上記2誌以外にも多くある。多くの学会誌とのさらなる比較研究を通して、若手研究者と学会誌の関係をより明らかにすることができるだろう。しかし学会誌の分析結果は、その学会誌の特徴をさらに固定化・強化してしまう可能性をもつ。たとえば、掲載論文に若手が多いというデータを提示することで、若手の投稿を増やし、結果として若手ばかりが掲載される学会誌になるなど。</p> <p>学会誌分析の射程の広がりを見据えながら、若手研究者と学会誌にかんするデータから学会の若手支援のあり方を考察し、議論を喚起したい。</p>

3) 坂田 勝彦 (東日本国際大学)

演 題	質的研究における「学際性」と若手研究者のキャリアパス ハンセン病問題研究のフィールドから
要 旨	<p>テーマセッションの趣旨に基づき、本報告は「若手研究者のキャリアパスと現在の複数学会の配置の在り方、資源へのアクセス可能性」といった諸問題について、報告者のこれまでの研究活動をもとに検討する。</p> <p>2001年の「ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟」熊本地裁原告勝訴判決に象徴されるように、報告者が研究課題として取り組むハンセン病問題は、研究者に対し、日本社会の歴史的・文化的状況と自身の思索を深く取り結ぶことを不可避の課題として要請するフィールドの一つである。そして、問題当事者の高齢化や相次ぐ逝去を背景に、各療養所の「将来構想」を巡る現況、各種の歴史的資料の保存・整備を巡る困難など、アクチュアルな諸問題への「応答」が研究活動にも求められている。そうした状況のなか、報告者は、社会学の複数分野での研究成果をはじめ、歴史学や文学など他の学問領域の知見、それら他領域の研究者との交流から多くを学んできた。</p> <p>このように、学際志向を強める現代の社会科学において、社会学の関係諸学会、他学問など複数の領域に関わる場を渡り歩くことが、具体的な社会問題を対象とする質的研究を進める場合、不可欠となっている。本報告は、質的研究を取り巻く学際的な研究活動や交流の一端に触れることで、若手研究者のキャリアパスを巡る現状の課題や可能性について考察する。</p>

4) 林原 玲洋(首都大学東京)

演 題	社会学者が「学際的」な学会に参加するために何が必要か
要 旨	<p>本報告の目的は、 駆け出しの(院生を中心とする)社会学者がいわゆる「学際的」な学会に参加しようとするとき、どのような「参入障壁」が存在するのか、また、 そのような「障壁」を乗り越えるために、学会としてどのような組織的支援が必要なのかを、報告者自身の体験に即して検討することである。</p> <p>報告者は、院生の頃より社会学以外の専門領域にも目を向け、いわゆる「学際的」な学会に参加することを模索してきた。だが、実際にその大会や研究会に参加してみると、ある種の「参入障壁」を感じるがあった。もちろん、そのような「障壁」は、個人的な努力や幸運な巡りあわせによって乗り越えられる場合もある。報告者自身、「日本記号学会」という学会では、入会時の紹介者にも当てがえない状態から、学会発表を経たうえで、機関誌に査読論文を掲載することができた。</p> <p>とはいえ、そのような個人的体験は、「ノウハウ」として共有することが難しいものである。そこで本報告では、いまずこしべつの角度から問題意識の共有をはかりたい。つまり、たとえ「学際性」を旨とする学会であっても、その文化(設立当時から受けつがれた慣習)や組織(実際に学会を運営しているメンバーの関係)のあり方が、ときに(意図せざる結果として)社会学者にとっての「参入障壁」となりうること、ここに着目して上記の問いを考えてみたい。</p>

5) 小宮 友根(日本学術振興会)

演 題	社会学の学際性と学会活動
要 旨	<p>社会学は諸社会科学の中でも特異な位置を占めている。法の研究は法学が、経済の研究は経済学が、政治の研究は政治学が…というように、諸々の社会領域にはそれを研究する個別の社会科学があるにもかかわらず、それらとは別に「社会」なるものを研究する社会学がある。社会学の独自性は対象ではなく方法にあるなどといわれる所以であるが、いずれにしても、そうした独特の位置ゆえに、社会学研究がかなり本質的に学際的な色彩を帯びることは確かなように思われる。社会学者が特定の社会現象を研究しようとするならば、それについて研究する他の社会科学との関係の中でみずからの研究を組み立てる必要があるからだ。</p> <p>このことは研究者個人の学会活動にとってみれば、多かれ少なかれ、自らの研究とかわる、社会学以外の学会にも参加していく必要があるということを意味するだろう。とりわけ若手の研究者にとっては、この点はメリットでもありデメリットでもあると思われる。学会報告や論文投稿の場所となる学会に選択肢が増えることで、研究の都合に応じて使い分けができる一方で、そうしたノウハウはかなりの程度個人が自力で獲得していかなければならない。また、金銭的な負担もかなり大きい。本報告では報告者の経験から、若手研究者が学際的に複数学会にまたがって活動することのメリットとデメリットを整理することで、若手研究者支援のための議論のたたき台としたい。</p>